
不幸のめーる

西絳恭裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不幸のめーる

【Nコード】

N3003T

【作者名】

西絳恭裕

【あらすじ】

明るい自殺めーるを送る子が本当に自殺をした。その子の遺書に殺されたと書いてあった。その架空犯人が……

（前書き）

ラフで読んでください

「自殺するう!! ? ヽ」

「どうして?」

「もうやってけない ヽだつてえゝ!」

「がんばって! ねっ! ファイトいっパーツ!! (笑)」

「えー! ーむうりー!」

なんなんだよ。

こんなに明るいまゝ。。自殺が明るいなんて。。。。おかし
ぎる。。

語りすぎた(焦笑)

私は塙^{かさはなみほ}美朋

私はこんなメールが十日続いて困りはて、私自身が自殺しそうにな

ってしまったから、友達に相談した。

「えーーーーー自殺う・・・！！あの子があーーーー」

「ちよつと大きい声が」

「ごめん」

この子はおつとり系のぼかーんとして子。だけど頭がめちゃくちやいい。たまに爆弾発言をする。久坂^{くさか}様

「ふーん。死んじゃえばいいのにね。死にたかったら。俺が不可能犯罪にでもしてやろうかつつうんだ」

「ちよつと・・・」

この子は正真正銘のヤクザ系。「俺」って言ってるけど女。男っぽイ。イタズラ好き。けんかつ早い。

でもうそは、つけないタイプ。思った事をすぐに口に出すタイプ^あ両^{わかいくゆ}
若井宮遊

「メール見る？」

「うん」

「あたりまえだろ（笑）ダチがこまってるんだから」

私は二人に見せた。

「ほんとうに、死ぬの？」

「美朋に”死なないで”って言ってほしただけじゃね？」

「うん・・・どうしよう・・・」

私は、泣いた。なんで私だけこんな思いをしなくちゃいけないの？

「電話してみれ」

「うん。そうだよ」

「でも・・・」

「がんばって！！自分じゃなきゃできないよ」

「うん」

私は、宮遊と楳にすすめられ電話をした。

「もっもしもし？」

「何？」

「本当に死ぬの？」

「うん！」

「メールあんなにデコメつかってて？」

「あつたりまえでしょ！！」

何で？死ぬ人がこんなに明るいの？

「きいて。うちの学校の机の中に手紙が入ってるから、うちが死んだらよんで！！たのしみだねー」

涙がこぼれてとまらなくなった。

「えーん。シクシク。」

「えっちよつと？美朋？」

「美朋？」

宮遊と楳は、びっくりしていた。

宮遊が感づいて私の携帯を取ってあの子と話した。

「なんで美朋がこんなに止めてんのに死ぬの？それに、メールも明るいし、もっとダチとか、親御さん達の事も考える。こんなにいいダチがいてよかったと思えっ。こんなに言っても死ぬのはただの自己中なんだよ。おまえ、こんないいダチ持ってたとおもえっ。・・・うん・・・うん。でもな〜」

30分

「んじゃ切るからな」

宮遊は、切った。

私は、ホッとした。助けられた。あらためて友達の大切さがわかった。

「ありがとう。相談してなかったら、私のほうがあの世に行ってた。」

「泣かないで！こちらは、なんにもしてないよ！」

「そうだ。煤の言うとおり、ただ、俺らは美朋の思ったことを言うただけだ。気にすんな」

こんなにいい友達は、はじめてだった。

「ありがとう」

泣きながら「これ以上ない」位のありがとうを大声で言った。

――次の日――

私は、ふつうに、学校へ行った。

学校であの子に会った。

「おはよう！」

「なんで言ったの？」

「あんなメールが毎日来たらこっちが、ノイローゼになりそうだったから相談したの」

「うざい。しね」

「えっ？」

「約束破り」

「だって」

「約束破りなんかこの世にいたらいけないだよ？」

「えっ？」

「来て」

私は今の状況が分からないままあの子に連れてかれた。

「ここは……？」

「屋上。自殺するには最適な場所。後、これ足元に置いとくんだ。だれかに見てもらうように」

「……遺書……」

「じゃあね。」

「駄目っ。駄目っ。誰か——たすけてー」

「ムリだよ。あのドアは厚いからこっちからの声は全く聞こえないの。きこえても……」

「駄目ね」

あの子は落ちた。私は、なぜかスローモーションに見えた。

これは夢か？夢だよね？夢であってほしい……
私はほっぺをつねった

痛かった。

泣いた。泣き崩れた。私も死にたい気分だった。

担任がきた。主任が来た。教頭が来た。校長が来た。楳と宮遊も来た。

楳と宮遊は私を抱きしめてくれた。

校長が、遺書を読んだ。

「いしょ

私は、いじめられてました。」

先生達は動揺していた。

「いつも、毎日ある子に死にたい。と言ったました。

死なないで、がんばれ、ファイト。言ってくれました。」

じゃあなんで

「でも、そんな言葉は、ウソでした。」

えっ？

「そんなはずねー。美朋はずっとずっと、心配してて」

「うるさい。校長先生の話をしけ」

「コホン。私は、誰にも言わないでと言ったのですが、友達に言ってしまったのです。その子は、自殺のメールがたくさんきて、困って言ったと言っているが、そんなのウソです。」

「ウソじゃないほんとうだよ。美朋は、ウソつかない。あの子がウソついてるんだ」

「黙れ」

楳は言ってくれた。

だけど先生達は聞く耳を、持たなかった。

「だって………!!」

校長が急に黙ってしまった。

「校長先生どうされました？」

「すまん。……だって

私を自殺に見せかけて殺したのは、塙曄美朋と、久坂樒と、西若井宮遊です。」

!!!!!!!!!!

ただびつくりした。

「は？何いってんだボケエ。チャウで」

「うちも。もちろん3人」

「わたしも。無理やりここに連れ出されて、自殺を止めたら、力尽くでおちて……」

「嘘を言ってんじゃねー。人が死んでんだぞ」

主任が怒鳴ってきた。

「俺らは、嘘なんか言ってるねー。なんにもわかんねーヤローどもに言われたくねーんだよ」

宮遊がどなった。

「フツ。警察が来た、残念だな。」

「えっ？あっ？俺らは、何にもやっちゃいねー!」

「そうだよ」

「どうして？」

「あいつに、はめられたー!」

私達は警察に捕まった。

「こんにちは、私は条浦すじうらです。」

「どうも」

「遺書からは貴方達が殺したとかいてあったが」

「ちがいます」

「やっただら？」

「いいえ」

「やっただら？」

「いいえ！」

「嘘つくな！ウソ付きガキがっ」

「っ！」

もう駄目だとおもった。

「黙秘します」

それから2年なにも発言しなかった。

廊下で榎と宮遊と会つが下をむいた。

泣いてしまっから。

（後書き）

これは3分の1ノンフィクションなんです（笑）
でも本当に自殺してないのでOKです。

もっと言うとメールらへんぐらいだけです。

（そこから僕の想像劇がはじまったんですう（笑）（

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3003t/>

不幸のめーる

2011年10月9日03時27分発行